既存建築の不必要になる空間に対するプログラム

不必要となる空間を暮らしのゆとりになる空間に変える

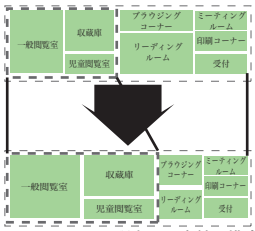
指導教員　吉松秀樹教授　印　　9AEB3121　板部　奈津希

1．プログラム構成から建築を考える

今後、情報や通信の発達が進み、モノは小さく、人の範囲ま狭くなるだろう。その結果、都市のなかに使われなくなる空間が生まれてくる。そのような空間を意味のない空間として放っておくのではなく、従来の使われ方とは違うプログラムを提案することで、余裕や豊かさをもつ空間となるのではないか。

2．プログラムから考えている建築家

レム・コールハースの「ヴォイドの戦略」では、ジェネリック（複製）とヴォイド（空虚）のように２つの異なる空間を隣り合わせることで緊張感のある空間や様々なアクティビティを誘発させている。現在の図書館のフレキシビリティは、多様なジェネリックのフロアを創り出すこととされている。そのため、プログラムは分離しない。その結果、個別の空間には独特な性質が与えられず、収蔵書が増えてパブリックスペースに浸食して行き、図書館を他の情報源から区別するような魅力をなくしてしまう (fig.1)。コールハースはシアトル公立図書館で、ジェネリックとヴォイドでプログラムを分離することで、プライベートスペースが浸食されることなく存在させている (fig.2)。

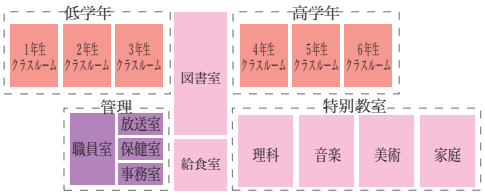


(fig.1) 現在の図書館の構成

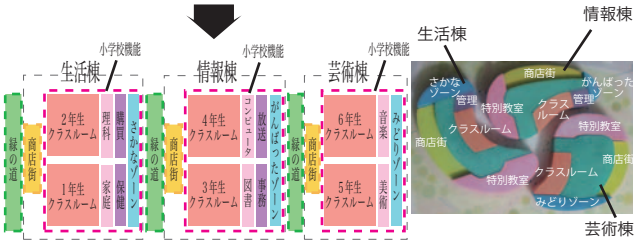
(fig.2) シアトル公立図書館のプログラム構成

3．ごちゃごちゃさを取り入れた小学校

「小学校と豊かさ」では、下北沢の「ごちゃごちゃさ」を建築に取り入れることを考えた。下北沢には、道が曲がっていることで感じる視界で感じるごちゃごちゃさと、そこにある店が若者向けのショップであったり主婦向けのスーパーであったりするプログラムのごちゃごちゃさがある。そのため、小学校に下北沢の商店街と隣接した緑道を機能に入れ、それらが混ざり合うようなプログラム配置とした。既存の小学校は低学年と高学年のクラスルームをそれぞれまとめ、特別教室は高学年に近く、共有学習スペースを学校の中心に置く配置が典型的なプログラム構成であるが、それでは学年ごとに行かない空間が生まれる (fig.3)。小学校の空間は、どの学年のフロアにも特別教室を置くことで、行かない空間をなくし、小学校全体にいろんな学年の児童がいる空間にした (fig.4)。



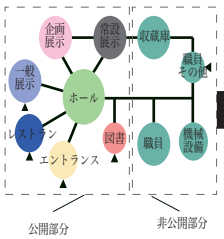
(fig.3) 既存の小学校のプログラムの関係



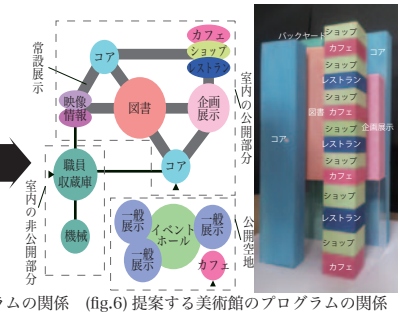
(fig.4) 提案する小学校のプログラムの関係

4．寄りみちしながら美術館

既存の美術館は、企画展示や常設展示のひとつひとつのプログラムがつながるため、それぞれの場所からは他の場所は見えず、閉鎖的で敷居の高いイメージを作り出している (fig.5)。「Museum of Popculture Tokyo」では、公開空地を広く高くとり、プログラムを塔状で分けることで 1 フロアに様々なプログラムが存在することを提案した。利用者は目標のプログラムのある場所に行くとしても、他のプログラムをめぐって行かなければならない。その結果、寄り道しながら美術館をめぐって行く行為が生まれる (fig.6)。



(fig.5) 既存の美術館のプログラムの関係



(fig.6) 提案する美術館のプログラムの関係

5．都市の使われなくなる空間を見つける

都市に存在する建物内のプログラムを把握し、都市のサーベイをすることで、今後都市の使われなくなる空間を見つけ、そこにどのようなプログラムを入れるかを考える。